関連学会印象記

1993年アメリカ麻酔学会 (ASA) 年次総会印象記

外　須美夫

某航空会社の格安航空券を利用しての旅行だったので今度も当然なんらかの困難が生じるだろうと覚悟はしていたが，案の定，シカゴで乗り継ぎ便に乗り遅れるという事態が生じて，目的地のホテルへの到着は深夜になってしまった．まずは仲間3人と巨大ピザの出前で腹拵えをして明朝からの学会に備えることにした．

今年の ASA は例年の開催地から外れて，アメリカ合衆国の首都，ワシントン DC に於て10月9日から5日間にわたって開催された．テレビによく出てくるホワイトハウスはそのままの形で存在し機能もしているようだったが，ワシントンの街並は，世界をリードする政治の中枢都市にしては雑然とした道路工事風景や散在するビルの撤去後の空地に，後ろ向きの寂しい思いを抱かせるものがあった．しかし，街のあちこちに配置された公園やスミソニアン付近の広大な土地は日本人にとって羨ましいゆとりもまた感じさせてくれる．

リフレッシャーコース（全84講）が初めの2日間，学会がその後の3日間となっており，全体の学会運営に関しては例年と大差はなかった．Breakfast Panel（9の各分科会），Clinical Update（計15），Workshop（7），Panel（31），Clinical Forum（9），Memorial Lecture（2），そしてScientific Paper (oral session 48, poster 23, poster-discussion 13) と盛りたくさんのプログラムが組まれており，麻酔に関連する学問や臨床に携わるどんな人も飽きることがない．ただし，20以上の会場で同時に進行するため，聴きたい Panel や発表はあらかじめ目ぼしいものを挙げて時間を調整しなければならない．それでも限られた時間のため，ほんの一部にだけ参加することになる．僕自身は結局のところ自分の興味のある循環と中枢神経のセッションを中心に参加したが，本人の神経回路が時差ボケによる混線状態では集中することができない．そんな時は，コンベンションセンターの2階に作られたこれまた巨大な展示場で，ブロンドのグラマーな女性の傍で麻酔機器やモニター機器の説明を受けたほうが下位中枢の刺激にもなり，得るものも多い．

今年は2064題の応募の中から1252の演題が採用されており，採用率は61%であった．アメリカ以外の採用は日本が最多の89題，続いてドイツ（65），フランス（41），カナダ（35）となっている．学術発表のあちこちで日本人の活躍が目立った．言葉のハンデはあるが，むしろ内容の優れた発表が多く，以前見受けられたような質疑応答にならない場面や立ち往生といったことは少なくなったように思う．

全体的にみると学術発表会場への参加者は例年より少なかったのではないだろうか．空席が目立ち，激しい議論，内容ある議論は少なくなったように感じた．僕の参加したセッションだけかも知れないし，今年だけかも知れないが，アメリカ麻酔学会のもしかしたら低迷のはじまりのようなものかもしれないと勝手に思ったりもした．

しかし，世界の麻酔学会における新しい知識，麻酔法，薬物，麻酔機器，モニター，そしてこれからの方向といったものが，本学会で紹介され，本学会がその発展の推進役を担っていることも事実である．若手の研究者が自分の新しい成果をアピールし，指導的立場の人達がまた膨大なデータを示す．そして，麻酔の一般的了解事項，スタンダードといえるものが本学会を中心に形成されて

九州大学医学部麻酔科蘇生科

Presented by Medical*Online

いく．麻酔の世界に参画していくためには，やはり本学会の動きに参画していかなければならないことを実感する．

今回の学会発表で目についた所を列挙してみると，1）Nitric oxide (NO) に関する研究，例えば呼吸管理における NO 吸入や麻酔作用における NO の役割などに関するもの．2）疼痛管理における clonidine や dexmedetomidine といったα2アゴニストや ketorolac の使用に関する報告．3）GABA receptor あるいは NMDA receptor と麻酔薬の関係．4）臨床に即した研究としては体温管理に関するもの，これは特にUCSF の Sessler の所からの発表が多かった．また，5）Sevoflurane に関する報告は，とくに日本からの発表が多く，注目を集めていた．6）新しい短時間作用性の麻薬として ramifentanyl の紹介．麻酔導入薬として用いられるが，やはり muscle rigidity が問題になるらしい．

ところで，desflurane に関して，数施設から，導入時の高血圧，頻脈が問題になるという指摘の発表があった．すでにアメリカではとくに外来手術の麻酔に多用されているようであるが，導入時の吸入濃度の急激な上昇に応じて循環系の亢進が生じるらしい．Wisconsin の Ebert らはヒトの交感神経活動を記録し亢進するさまを見事に示していた．このことは Anesthesiology 9月号の editorial view にも取り上げられていたが．

そのほか臨床発表として，麻酔中の heart rate variability に関するもの，laparoscopic cholecystectomy 時の血行動態や内分泌変化に関するものが多く見られた．

ASA の学会では，学術発表よりその他の企画により面白いものがあるように思う．とくに Clinical Forum は症例を想定しての討論で，意見のぶつかり合う場面があり結構楽しめる．こういった議論のやり方は日本人がもっと教わってもいいところかもしれない．

ワシントン DC の天候はリフレッシャーコースの初日だけが好天で後は肌寒い日々だった．1日だけ市内の観光をしたが寒さと時差ぼけで記憶回路への入力は断線しがちだった．

最終日の発表を終えた後，ダレス空港からプロペラ機に乗り，ロブスターの待つボストンに向かった．

Presented by Medical*Online